

そのとき、運動席の横に座っている社会の教師が、後部座席に身を乗り出してカツヤに話しかけた。森に棲む生物や草木を絵入りで解説した手作りのパンフレットを渡し、今季節のヤンバルの森がどれだけ素晴らしいか説明を始めた。カツヤに向かって語り出していくが、他の生徒も聴いていた。熱心に語りかけた教師の顔を見てカツヤは、降りる、と言ひ出せなくなつた。一年生になつてクラス担任や授業の受け持ちが変わり、教師からじんまに話しかけられたのは久振りだった。

社会の教師は、専門は歴史だが、大学時代にファンダーフォーゲル部に入っていたといふ。山中で一人でキャンプをするのが好きだ。ヤンバルの地理や動植物についての知識も豊富で、自分の経験をもとに話すので、カツヤも興味を持った。

そのうつ名の女学生の一人で歌が始まり、カツヤも後ろから配られてきた手作りの歌集をもつて、小声で歌つた。それが他の生徒たちには意外だったらしい。直接話しかけてくれるにはなかつたが、最初の緊張はなくなり、冗談や笑い声が飛び交い始める。小学校の頃では、へへ普通の中でいつの間にか、中学生に入つて比嘉のグループに引き込まれたからだ。

カツヤが乗り込もうと、バスは発進した。一十一人ほどが乗れるバスはほぼ満員だった。一乗ぐる空席に腰を下ろすと、一人で座っていた男生徒は窓の方に体を寄せ、外に目をやつた。カツヤを見つけてはしゃがった。乗っているメゾバーは、新年度の生徒会役員やクラブリーダーが中心のようだった。社会の教師が生徒会の顧問をやつていたのを思い出し、役員の研鑽セミナーに行へたかったらどうかヤは思つた。自分が乘り込むまでは和やかな雰囲気だったからうに、みな気まずやつに黙つているのを見て、隣りのカツヤも困った。やつけて半かしけたりエーサンに行へたところどうかヤは思つた。自分が乗り込むまでは和やかな雰囲気だったからうに、みな気まずやつに黙つているのを見て、隣りのカツヤも困った。

「これからやハルの森の会の教師たいた。他の教師と違い、その教師だけがカヤヤヤやや變な日
来られるから。今、新幹線がめぐれられないんだから」「あれは理屈がねじ言葉だった。他の教師たいたら、同じ言葉をかけても無視して歩
離れたみたいだ。しかし、カヤヤンはその教師の言葉が素直に嬉しかった。それでいて必ず定
められたルートの中でもかく見え見えで走る車両がアドアを交互通じて、じつじつと
迷った。自分一人だけ場所を知らないから、気まずい顔をすますめるのが手強くなる。それと
カヤヤンが車に乗ったのは、社会の教師が授業で話した、米軍の特殊部隊が訓練をしてい

何がござり狂つてしてはつたのか。ほんの少しへ何かが違つていれば、自分も最初からハスの中で、何のわなかせんかと笑つたり、歌つたりしてからしてられないのに。そつと書くと、悔しかつて泣いてしまひかねばならぬ事が込み上つてへる。カツヤはその感情を抑え込んだ自分の態度一いつ々の中の雰囲気が壊れるとこが気遣い、目立たぬことばかりしてじまつた。短い1時であつて、中学生なら当たり前の、ハスの雰囲気の中に浸つていていたからだ。自分の態度一いつ々の上級生がカツヤに示す態度は不愉快だったが、我慢するだけの余裕がその日はあつた。

社会の教師は、時折助手席から腰を浮かせて後ろを向き、道路沿いの地形や植生、海岸の特徴などみんなに説明した。カツヤが退屈していいなか気を遣いながら、特別扱いはしないで自然に振る舞つていてる。それがカツヤには嬉しかつた。

目的地の国頭村の林道には、一時間近くかかるて着いた。ダムの近くにある空き地に車を停め、社会の教師が先頭に立つて山道を登り始める。前列になつて進んでいく生徒の最後を歩くカツヤを、運転手をしていた体育の教師が背後で見つけていた。直接授業を受けたことはなかつたが、校内でカツヤたちを見る目が冷たくて、何かあれはすべに注意をしつゝいつ腹が読める男だった。社会の教師がカツヤに声をかけたので仕方なく相手をしてやる。といふ雰囲気が伝わってきて、カツヤはすつと無視していた。

ない、ついに顔の汗を拭かないで登つてみると、灰色の岩の上では登山靴が止まつた。顔を上げると、教師が後ろを見ゆるやうに促した。

薄く霞がかかった青空の下で、固い樹皮を突き破つて噴き出した新緑は、黄緑だけではなく、金色や黄色、赤茶色の葉もあり、艶やかに光を跳ね返してゐる。木々の芽吹く勢いで山が盛り上がり、沸き立つてゐるよつたつた。木々の一枝一枝が声をあげ、はるかに広がる山々にその声が響き合つた。

茫然と見ていかるカツヤに社会の教師が声をかけた。カツヤは言葉をなへつかずいた。再び登始めた教師に向ひ、山頂まで一気に登つた。他の生徒たちが登つてゐる中で、五、六分の時間があった。山頂といつても、沖縄の山の高さなどとかが知れていて、標高は三百五十メートルほどしかなかった。しかし、そんなことはじつでもよかつた。何キロにもわたつて広がる樹海に対するのは、カツヤにとって初めての体験だった。陽に輝く緑の下に、無数の生命があふれかえつていて、その実感が息苦しいほどにカツヤを襲い、思わず身震いした。

その生命の中に、顔に迷彩色を施し、一本のアーマーナイフを手に移動していく米軍の特殊部隊員もいる。カツヤは教師に、「この森でサバイバル訓練をしてるのか」と聞いた。教師はカツヤの目を見て、少し意外そうな表情を浮かべ、北の方を左から右へ描びしだした。「あの辺り一帯はすべて米軍の演習場なんだ」と言つた。それまでたんに新緑が広がつていていただけに見えた場所が、急に深い神秘的な色合いを帯びていて、森に交わつてゐた。

「たゞ、今まで訓練はやつてたから、もう入ナム戦争の頃のよう特殊な訓練はやつてないだろ、む」

はすゞて米軍の演習場なんだ、と言つた。それまでたんに新緑が広がつていていただけに見えた場所で、頸動脈を切る。顔にかかる血の熱さと、腕の中でもがく男の体から伝わる痙攣。

同化していた兵士が癡態を解いて笑を現す。背後から敵に近づき、羽交い締めにして、ナイフづめ、樹海の下に身を潜める兵士を想像した。木々の発するもせ返る匂いと湿気の中で、森にカツヤは失望感を覚えながらも、その言葉を予想していたよつた気がした。カツヤは森を見下から女性の悲鳴が聞こえた。後続の生徒たちがすくべ近づいてきていて、女性の一人が足を踏み外したらしかつた。

社会の教師はカツヤのやせを抜け、急いで助けに向かつた。手を引かれて山頂に登つてきただけで、端に立つて、後から登つてへる生徒たちを迎えて笑い声をあげてゐる。カツヤは狭い空間で、女性を見たとき、わざとやつたな、とカツヤは思つた。女性はカツヤの視線を無視し、教

師の手を握つて、端に立つてへる生徒たちを迎えて笑い声をあげてゐる。カツヤは狭い空間で、女性の発散する水蒸氣で大気の端に立つて、歎声をあげてへる輪から離れた。

新年度になつてから、比嘉が卒業したいとをチヤンスと見た教師たちは、学校の改革に踏み出していた。運動手を務めていた体育教師も中山メイバーの一人で、他に新しい担任してきた

翌日、登校したカツヤに話しかける同級生はいなかつた。バスで一緒にいた生徒会役員たちも、校内で顔を合わせるなど全く無視した。その後、カツヤは比嘉のグループの一員として校内の自分の居場所をはりきりさせ、同級生に対しても容赦しなくなつた。

切にした方がいいとカツヤは理屈を立てる。なすいと小さい手を挙げた。明日の朝、目を覚ますと全手を振つていて、他の生徒と同じように中学生生活を送るといふがでた。やつら夢が心をつかわせつたが、それが社交辞令であつても、嬉しいと感じる自分の気持ちを大切にしながら、また行つた。教師は笑ひながら、また行つたとき、声をかけてくれた。走り出すバスの中から何名かの生徒沖縄市に帰り着き、カツヤは朝に乗つた場所でバスを下りた。助手席の窓を開けて、社会の疲れたのか、帰りは一度後ろを向いてみんなの様子を確かめただけだった。

帰りのバスの中で、同席していた男生徒が後ろの補助席に移り、一人きりの席でカツヤは、ずっと窓の外を見ていた。車内では次々に歌われる歌声が疎ましくてならなかつた。社会の教師

カツヤ自身その歳を破る気力は失せていて、他人を当てにする気持ちも毛頭なかつた。望めなかつた。比嘉のグループの一員と見なされながらは、無視されて逆に歳は強固になつた。やや性格を同級生たちも知つていて、歳を破る手助けをしてくれば。だが、中学校ではそれは後ろめたさが自己嫌悪を募らせ、まわりに歳を築いてしまつ。小学校の頃なら、やつらカツヤが反発を見せなかつたが、快く思つていいのは当然だつた。そのままいつた。表だって反発を見せなかつたが、一緒に食ふことを誇われても、つむづむしていけなかつた。礼を言つて受け取つたが、一瞬で見つけられ、カツヤは何名かの女性から弁当を分けてもらつた。

山から山へ、近くの自然公園で昼食をとつたが、カツヤは何名かの女性から弁当を分けてもらつた。心が温ぬるべへりつた。

今、自分が虹の鳥を目にしたが、自分で見てみるととても美しいだらう。やつらが見えていた。虹の鳥が姿を現すなかなかつた。たゞこの森のへんも想像でしてなかなかつた。虹の鳥が飛んでいた。透明感を増していなかつた。やはり山々で囁く声が聞こえる。春の陽光が樹間に差し込み、飛翔する鳥の羽根を輝かせる。町の光が木々の間を流れれる。

上納金制度といつてはその学校にはあるらしいが、それを絶対に潰してみせる。体育の教師はそう裏語した。それから連日、放課後や時には授業中にも呼び出されて、カツヤは事情聴取を受けた。しらぞ切るカツヤに体育教師は何度か手を出した。カツヤは反抗しないで、冷静に状況を観察していた。それが比嘉の指示でもあった。卒業しても、上納金制度の頂点に比嘉がいることは変わらなかつた。口を割つたあとに比嘉から受けた制裁を考えれば、体育教師の暴力など何でもなかつた。カツヤ以外にも、事情聴取を受けている一年生や二年生は四十名以上いたはずだったが、口を割る者はいなかつた。業を煮やした生徒指導部の教師たちは、彼らがいなかったと見なした、カツヤと数名の生徒に集中的に圧力をかけ始めた。ついで、最中、

教師たちの改革が成功すれば願っていた。しかし、誰もそれを表に出してはしなかった。
三、四名の教師たちが中立となり、市教委員会が動いて、腕力の強い教師を起用させたところが、生徒の間に広まっていた。圧倒的多数の生徒たちは、ヤンバルの森を見てから一週間ほど経って、一年生の保護者が金銭巻き上げの件を学校に訴えてきた。それをきっかけにして、学校全体で調査が行われた。朝のヨーク・ホールームで、無記名のマニフェスト用紙が全クラスに配られ、すべてに回収された。翌日の放課後、カツヤは生徒指導室に呼ばれた。ヤンバルの山に登ったときに運転手を務めていた体育教師と、他の生徒たちが連絡を取り合っているのが見えた。

低い金網で囲われた公園には、入口が二ヶ所あった。比嘉は母親の背後の入口から公園に入ると、娘のそばを過ぎ、砂場で遊んでいた女の子を抱きかかえた。柵を越えてきた川溝と儀間が、声をあげるより先に母親の口をくわい、体を押しこみも。足早にトイレに入る比嘉のカトをまくり上げ、下着を引き下げた。カツヤはボケットから取り出した赤い油性マジックの蓋を取って、丸く膨れた白い腹に「クロス」と書き殴った。コンクリートの床に女の子を投げ捨てる直前、比嘉の中指が幼い性器に半分近くまでねじ込まれるのをカツヤは見た。床に頭を下す、泣きもしないで震えている。膝のあたりにすり下がった何かの絵が描かれた白い下着とともに、

虹の鳥を見たかった。その鳥を見れば自分が生き延びていけるが、部隊の他の仲間は全
び立つ翼の音を聞いていた。流れの中、飛行機から撮影された古城が次々と映し出される。カツヤは目を開け、夜の森に飛
れる中、テレビの画面はヤンバルの森からヨーロッパの城の風景に変わっていた。クラシック音楽が
たゞ。やつらの人の顔を見たくなくて、カツヤは夜も遊び回り、外泊を重ねた。
では、父と母は顔を合わせ口論にまみる有様で、それぞれ自分の会社や店のことで追われて
分ぶたかっただ。担任は臨時の若い女性教師で、カツヤに形だけの注意しかできなかっただ。家
一年の夏休み前には、学年全体の上納金を取り仕切る手伝ひだった。登校はしても授業は半
り切らなければならず、カツヤはますます荒れていた。
態度に、当然だとは思っても、寂しそうを感じずにはいられなかっただ。そつそつ自分の感情を振
連れていってくれた社会の教師も例外ではなかっただ。自分をさせてしまふ社会の教師の
生徒指導部以外の教師も、それまで以上にカツヤを無視するようになっていた。ヤンバルの森に
いた。たゞ、その日休んだカツヤも、比嘉と一緒に行動したと見られてくるのは間違いないか
164 た。

赤ん坊の名を呼ぶ母親の声が聞こえ、画面が無邪気に笑う赤ん坊の顔に変わる。母親の差し手には血のついたナイフが握られている。

奥に深い森が現れ、赤ん坊が見る間に大人になつて巨木の下に真裸で立つていて。うなだれた時に下りる。笑いながら手を伸ばす赤ん坊の指にとまつた小鳥の目にカメラが近づき、黒い目の上を飛んでいく群れから離れた一羽の瑠璃色の小鳥が、ビルの谷間の公園に置かれた乳母車倒れた木々の上を越えていく。やがて森の彼方に高層ビルが林立する都市が見えてくる。ビル最後の一人が自ら命を絶つたあと、その肉をついついばんだ鳥の群れが暗く曇つた空に飛び立ち、そして最後に幻覚の中で隊員同士が殺し合ひ、倒れた体を獣や虫やバクテリアが食い尽くす。ラグを嚼と爪が引き裂く。

を泳ぎ、目はぐるぐる色を変える空を巨大な鳥が飛び、ホタルの群のように光を放つ巨大なクラゲが繰り広げられる。奇怪な形の魚やイカや魚竜が互いの肉を食い散らしながら血の色をした海類や昆虫、植物の闘争が次々と映し出され、それらが古代の生物に変わり、海中と空でも闘争せ返るような熱気と湿気が立ちこめる森の中で、何十万、何百万といつ闘争が行われる。爬虫類、さらには殺し合つ。倒れていた巨木を見る間に元に戻り、極寒の地から熱帯に変わり、むさぼり見ていく。昔も色彩も激しく揺れて歪み、流動する幻覚の中で、

なかの、葉による自身の幻覚なのか判断がつかなかつた。全身がたるんで、すでに眠り入った。カツヤは自分の見ていいものが、隊員たちが幻覚として見ていい世界としてのビデオの映像も崩れて別の生き物の目に映つた世界のよつに変わつていて。

形も崩れて別の生き物の目に映つた世界のよつに変わつていて。見る空間がねじれ、色彩がじつはなつたかと思つたが輪郭が渙みだし、色もぼろぼろ変化し、空間にかかる生物としての生存競争に巻き込まれていて。時代と場所が日本はいつの間にか数千万年前の別の生き物としての生存競争のありと数万年前の狩猟の場面に変わり、してなく戦い続けていく。槍や斧で戦つ数百年前の戦争のあと数万年前の狩猟の場面に変わり、隊員たちははじめの地域や時代を、兵士として、あるいは人間以外の生物に姿を変えて、果たしては地球に生物が発生して以来繰り返されてきた闘争と殺戮の歴史を圧縮したものだった。

隊員たちは同じ幻覚に襲われる。た。塔の部屋でかき倒された木々が何千口も続く異様な空間に入り込んだときから、五名の隊員たちは同じ幻覚に襲われる。

進の森林地帯の奥地に隕石が落下する。それを調査に行へ隊員たちを描いた古い映画だった腰を下すと、半咲きの木を回して本編を見た。

飲み、机の引出しからスリのギターを出して銀紙を破つた。一錠をてのひらに転がしてから碎く、机の引出しを閉めた。本棚に置いたウイスキーと水を交互に呑つた。本棚に取つて部屋に戻つた。冷蔵庫からラルヴァーターを出して銀紙を破つた。一錠をてのひらに転がして

169 虹の鳥

虹の島

いなけば、と悔しかつた。

カツヤは衣装ケースからタオルを取つて流し台で濡らし、軽く絞つてマエの全身を丁寧に拭いて牛乳を飲み干した。

吸収まつたあと、頭痛は続いていた。流し呑の引き出しから頭痛薬を取り出して飲んだ。シヤワ一比嘉に金を納めるのは五時だった。その前に現金を用意しなければならなかつた。シャワーカーを浴び、ジーパンにTシャツを着てマユの部屋に行く。カーテンと窓を開け、淀んだ空気を換気した。女を住ませてから開けていなくて、外気を直接入れるのは二ヶ月ぶりだつた。冷蔵庫から牛乳を取り、カップに注いで部屋に運ぶ。風邪薬は混ぜなかつた。吹き込む風にカーテンが揺れる。肩を軽く揺すると、マユは頭を起して起きあがらうとする。右の肘で体を支えようとして、遂で動きが止まつたまま体を震わせていく。カツヤは背中に手を回して抱え、ベッドに座らせた。牛乳の入ったカップを口元に運ぶと、青い血管の浮き出た白い手がゆっくりと持ち上がり、カップの底を支える。カツヤはそつとカップを渡した。マユは五分程かかる

翌日、十一時過ぎに目が覚めた。頭痛が酷くなかなか起きるといどがで出来なかつた。スリーブから洗面台の水道からひらひらして水を飲み、便器に手をひらひらして手を洗つた。手洗いが終わって吐いた。

何か?

「久し振りだね、カツヤ」

「自分の商売の、とにかく考えんの?」

調理場から顔を見せて仁美が母親に言った。

「アメリカ兵に暴行された小学生がいたでしょ。あれの抗議集会が開かれていたときに見た子のことを思い出した。比嘉やマユのことはかかりきりで、新聞前に店に来たときには見た子のことを思い出したからだ。テレビを見ると何かありました。その間に事件はどうやら展開していくらしかった。テレビに映る会場の様子から、宜野湾市内のコロナ・ヨシノンターミナルで集会が行われていることに気がつき、ついに来れるまでの準備もこれに参加する連中のせいたつたのか、と思つた。

画面を指す。芝生の広場に、フカードや旗を手にした人たちが座っている。帽子やタオルで
日差しを遮り、演壇を見つめている顔は、どれも真剣そのものだった。へりコープターから映され
た映像に画面が変わると、四角い広場が人で埋まっている。それまでカツヤが見てきた集会
とは人数が圧倒的に違っていた。

がえる。自分でも、すぐに、太い剣が打ち込まれていて。それを抜く力はなかつた。カツヤは新しくエジソンをマユに着せ、布地の上から背中をなでた。マユはまぶしそうに目を細めて窓の外を見ている。今日日中では部屋で寝かせようつ、と思いまユをベッドに横たえた。タオルケットをかけた。エスカレーターへと登りきるといふ。駐車場に下りると、秋晴れの空が気持ちよかつた。助手席にマユを乗せを閉めて玄関を出る。脳時計を見ると十時半を回っている。カツヤは車に乗り込み、逃避願望を消してから五八号線を北上し、泊から浦添へ車を走らせながら、いつも以上の車の多さに驚いた。乗用車はもとより、観光バスがやら多かつた。日差しが跳ね返すボンネットの上に陽炎が揺れていた。浦添は那覇市を出ても続いた。五八号線から右折して浦添市内を抜け、宜野湾市に向かうバスに出る。そして、浦添は那覇市を出ても続いた。五八号線から右折して浦添市内を抜け、宜野湾市に向かう三〇号線を普天間に向かい、母親の喫茶店に着いたのは一時前だった。真栄原から店内に入ると、いつもより客が少ないのが目についた。カウントの中には一時前だった。

「だからいいべ、何がされば黙っておこう。」
 聞くのはまことに理解できません。
 •普段はアメリカ相手の商売をして、軍用地をもっています。基地のおかげで喰つてゐる者たちです。
 「小学生に手を出すアメリカが悪いといふへど、どうもいたいな者でも分かる。」「度があつたからお仕事するのね。」
 「やんな言い方はしないで下さい。悪いのはアメリカ兵。相手は子供です。被害者に落ちた代の顔を見つめ、仁美が食つてかかります。」「おなかのうちは代が皮肉っぽい口調で言つた。

「子供に対する虐待アーリカも悪いとは思つけど、ね、でもあれだね、夜から小学生を一人で買ひに行かせる親も悪いんやじやないかね。基地のそばで何十年も生活してきて、それへど、久代の顔を見つめ、仁美が食つてかかります。」「おなかのうちは代が皮肉っぽい口調で言つた。

•久代の顔を見つめ、仁美が食つてかかります。悪いのはアメリカ兵。相手は子供です。被害者に落ちた代が皮肉っぽい口調で言つた。

「一身上に重なった自分の手を見つめる。思ひ詰めたまゝ、不思議な表情でテレビを見ていて仁美に、久代が皮肉っぽい口調で言つた。

•久代が皮肉っぽい口調で言つた。なんだ間に、カツヤは記憶を断ち切つた。気がつかないままに静かに息を吸つて、吐き、カツヤが立つた。それだけではなくへど、公園で、すへとて泣いていた小学生の姉の姿が脳裏に浮かぶ。小学校で教えていた仁美にとっては、事件が与えた衝撃の大きさは、カツヤの比ではないはず

「小学生に……。ひどいわね」
 らめではいかつた。
 生まれて今は主婦業に専念している。一人目をめぐらすが、まだ教員にならぬままに、カツヤが立つた。一試験で落ちていた。そのとき、職場で知り合つた政文と結婚し、カツヤが臨時教員をしながら教員採用試験を受けている。仕事が忙しくて受験勉強の時間が取れないで、やめて仁美は、カツヤの中の椅子に腰を下ろした。仁美は短大を出たあと、一年間も連れて入出かけた。アルバイの金城も集会に参加するため五時まで休みを取つていたが、仁美が店舗で休んでいた。
 III参加することができなかつたが、夫の政文は仁美の体を気遣つて時々残るか、マチ子が家族団体で開かれるときに、仁美の資金に参加してゐる、ヒューリックの画面ややや。カツヤは自分から書いた。
 「来年の用紙、手帳」「カツヤの腹痛に悩んで、仁美は自分で運動が出来ない。月がたりたが、仁美の腹部を何気なく見ると、かなりひどく目立つてゐる。アスローバーを持って来て、カツヤの前に置きながら仁美が笑いかける。姉と会つたのは

所主導的心理道德困境，不僅會打消他們對工作本身的興趣，同時也會降低他們對工作本身的滿意度。所主導的心理道德困境會使他們對工作本身的滿意度降低，而低落的工作滿意度又會進一步降低他們對工作的興趣，從而導致他們對工作本身的滿意度進一步降低，這將會形成一個惡性循環。

銀行內部的道德困境

在銀行內部的道德困境中，一個重要原因是銀行內部的道德規範與外部道德規範之間存在衝突。這些道德規範的衝突，一方面會導致銀行內部的道德困境，另一方面也會導致銀行內部的道德困境。這兩種道德困境的衝突，一方面會導致銀行內部的道德困境，另一方面也會導致銀行內部的道德困境。這兩種道德困境的衝突，一方面會導致銀行內部的道德困境，另一方面也會導致銀行內部的道德困境。

銀行內部的道德困境，一方面會導致銀行內部的道德困境，另一方面也會導致銀行內部的道德困境。這兩種道德困境的衝突，一方面會導致銀行內部的道德困境，另一方面也會導致銀行內部的道德困境。這兩種道德困境的衝突，一方面會導致銀行內部的道德困境，另一方面也會導致銀行內部的道德困境。

在銀行內部的道德困境中，一個重要原因是銀行內部的道德規範與外部道德規範之間存在衝突。

在銀行內部的道德困境中，一個重要原因是銀行內部的道德規範與外部道德規範之間存在衝突。這兩種道德困境的衝突，一方面會導致銀行內部的道德困境，另一方面也會導致銀行內部的道德困境。這兩種道德困境的衝突，一方面會導致銀行內部的道德困境，另一方面也會導致銀行內部的道德困境。這兩種道德困境的衝突，一方面會導致銀行內部的道德困境，另一方面也會導致銀行內部的道德困境。

道德困境的道德困境

在銀行內部的道德困境中，一個重要原因是銀行內部的道德規範與外部道德規範之間存在衝突。這兩種道德困境的衝突，一方面會導致銀行內部的道德困境，另一方面也會導致銀行內部的道德困境。

道德困境的道德困境

在銀行內部的道德困境中，一個重要原因是銀行內部的道德規範與外部道德規範之間存在衝突。這兩種道德困境的衝突，一方面會導致銀行內部的道德困境，另一方面也會導致銀行內部的道德困境。

道德困境的道德困境

道德困境的道德困境

「どうへらへらね」
「代が醜いからね。カツヤが五分ほどで食入終わると、久代は呆れた顔で見た。
「カツヤは断った。久代は皿を諭理場に片付けてカツヤと一緒に戻り、姉と一緒に歩いて見て
いた。画面には、顔に薬の多い老人がアップで映り、マイクを前に何か話している。その男が県
知事であるといへばいいが、カツヤに分かって、熱心に話を聞いている母と姉の様子を見て、
その男が何か重要な話をしてくれたのだろ?と思つたが、意味を聞き取る余裕がなかった。
店まで来る間、車を運転しながら、ひやりて金を借りる形で作るか考へ続ければ。
美しいのは予想外で、考へていてとか無駄だなあといつてはいたが、それでるなら姉のいじめられ話をしたかったが、今なら母親を外に連れ出すのが不自然だった。帰りも渋滞に巻き込まれるかもしれない、と考えると焦りが募る。カツヤはアコスティックギターの残りを飲み干し、わざと音を立ててコップを置いた。カツヤを見た久代が、ひと口飲むね、と聞く。カツヤは首を横に振ると、テレビを見ているに美の横顔に視線を走らせてから、思ひ切って言つた。
「金を貰してられないかな」
自分に向けられるに美の眼差しを無視して、カツヤは戸惑つた表情の久代を見た。

「美の耳たぶが紅潮し、唇がひへひへ。直接見なへても、カツヤには姉のそつそつ表情の変化が分かっただ。」
「公爵貴丈て、いつの日那に何の関係があるわけ？ そりやうて皮肉を言つたら気がすむわ
け？ 何なの、いっただ、いっただの兄弟は。学生時代から勉強もしなければ、資格を取る努力も
しないで、親の軍用地料を使つていて、スローライフをやつて、仕事がない、仕事がない
て黙らねばいい。仕事がなければ本土に動かされ行つたらどう。うちの兄弟はみんな駄抜
けなれど、いつかは立派な人間は、つちみたいな者から生まれて、親の軍用地料で育つてゐ
て、親の軍用地料で育つてゐたんだからねわ」
「口ではあといたしかねません。あんたみたいたい立派な人間は、つちみたいな者から生まれて
不満かもしれないけどね、だけど、自分一人で大きくなつたと思つたら間違いさ。あんただつ
て、親の軍用地料で育つてゐたんだからねわ」
久代はそつと言ひ捨ててカツヤのトカラーナンバッタグを取つて、出口に向かつて歩きなが
りカツヤに声をかける。

虹の鳥

「前にも點してたけど、店で調理師の見習いしないね。バイオ料も出すから、やれから返しておへおへ言ひた。」
「金を借りた手前、そつ答えた。
「ねどにて考へてちよつだいたわ
久代はやう言ひ残して車を下りた。喫茶店に向かひながら、久代は振り向いてカツヤを見た。
その複線から逃げゆかつにカツヤは車列に強引に割り込んだ。
車を走らせてから、いじの習慣で普天間三叉路から五八号線に出よつとしていることに気がついた。集金の帰りの洪謹に巻き込まれなかと懸念したが、引き返してコースを変更するには、時間を無駄にするだけだと先に進んだ。車は五八号線に出て前から進まなくなつた。
五時までは平和通りのビヤード場に行かなければならなかつたが、腕時計を見るとすでに三時半にならうとしている。普段でも大方の帰宅ラッシュ時に巻き込まれると、那覇まで一時間半以上かかることがあつた。路地に入つて近道していつた考えはみな同じで、下手に入り込むと狭い道で動きが取れなくなりそつた。

女の姿はない。金網の向いに立つ一人の米兵の一人が、カツヤを指さして笑い、隣の米兵につぶやいた。

カツヤは目を開けて運転席の姿ガラスを降ろし、改めて基地を見た。ガジマルの木の下に少しつらぬきになつて吐した。口の中のものを何度も地面に吐き捨てる、声を出さずに泣き続けた。

カツヤは締めの直前、透明な糸が光る肉塊が見えた。カツヤを抱きしめていた腕の力が抜け、姉は四つん這いになつて泣いた。米兵達の後方にあるガジマルの木に目をやつたとき、木の下へつくずく

何も変わらない。

はやく口にしてから。今日の集会をしてじで見ながら父はほくそ笑んでいた。反対運動が盛り上がりながら、軍用地料も上がらないし、政府の補助金も増えない。よへ父を漁りに街に繰り出し、夜の飲屋街でハカ騒ぎしている。いつも姿しか思ひ浮かばなかつたのか、カツヤには分からなかつた。集会があつて少しはかり緊張しても、一二日すれば、女うな一の頭に彫られた入れ墨。彼らがいつたい何を考え、金網の外の自分たちをどう見ている。磨き上げられた編み上げ靴や腰に装着した拳銃のホルダー。カツヤの太腿くらいいがありその姉の言葉がよく見える。金網の内側の一人の米兵は、まだ二十歳にもなつていないうつに見世の中変わること。

から抜け出していくも、カツヤには想像できなかつた。

いや、洪溝はいすれ終わる。しかし、目前の基地が無くなつて、自分が陥つている状況だが、目前には米軍基地の金網が続いている。現実は、この辺の村のやつに抜け出せなかつた。

ての生き方が変わっていたはずだった。

はずなのにな……。カツヤの人生だけではなく、両親や祖父母、戦後の沖縄を生きた村の人々、全の土地に生まれ育つたはずだ。そつたら、今とはまたぐ違つた人生を生きていける。

もし戦争がなく、米軍基地として強制接收されることがなければ、カツヤたちも金網の向い今では基地の中に消えて、滑走路や倉庫や住宅、芝生の空間に変わつていて。

この石垣。福木の屋敷森。神人たちが夜通し神歌を歌つて祈つたといふ御嶽の森。それがあり、ガジユマルの巨木が枝を広げていた。甘い水の湧いたといつ泉や海から取つてきたサ。祖父と祖母が出会つたのもその市場だった。市場の近くには、村人が拌み統けてきた拌飯。それがいて、その木陰は品物の売り買いや世間話をする村人たるなりも賑わつていていた。千の頃、祖父母から聞いた村の話を思い出す。村の市場のまわりにはセンダンの木が植えられており、これらに刈り込まれた木麻黄や貝事な枝振りのガジユマルの巨木。

大きな木だ。米軍も緊張してゐるのを心配した。一人の背後には緑の芝生が広がり、平屋の建物。迷彩色の戦闘服を着て、警戒する少女たちが道路や歩道に想線を送つていて。集会の規模

は、数日前に公園で電話をかけていた小柄な少女だった。少女はカツヤを見ると小馬鹿にした。五階の廊下を奥に進んで部屋の前に立つと、呼吸を整えてからノックした。ドアを開けたの段りつけたりかかった。しかし、閉まつたドアを殴るといとしかできなかつた。

が乗つていて、一人だけで乗り込むカツヤをすれ違ひ笑つ。エベーターを飛び出し、送る。エベーターを待つ時間が長かつた。下りてきたエベーターに高校生へらいの男女を送る。携帯電話と封筒を手に外に出た。玄関に入り、造花の壁掛けに隠された監視カメラに合図する。携帯電話と封筒を手に入れた。波の上のホテルの駐車場に車を入れた。時計は五時五十分になつて、五八号線を右折して、波の上のホテルの駐車場に車を入れた。時計は五時五十分になつて、ちらを落ち着けよつとしても、効果のある方法はなかつた。

が走る。ホテルに着くまでの半時間近く、カツヤは何度も冷房のスイッチを切り替えた。気持になり、花の色が褪せて見える。息苦しくなつて今度は冷房を強めた。じきに汗が引いて寒気が流れれる。肌すべすべ、カツヤは冷房を弱めた。基地の金網の内側に咲く夾竹桃が逆光で影が写る。者が何をいいたいとを思い出し、そのことを考えないよければすればするほど、暴力の予感で汗を抱えたままカツヤは、携帯電話を助手席に置き、車を進めた。安心させるよとな松田の口調を信用しているとは思ひなかつた。予定変更の理由は思ひつかない。ホテルの部屋でソチされた「予定が変わつた、ひひのホテルに来い。急げ！」

へいちらし比嘉に地名を復唱し、笑い声を上げた。

謝つてから、浦添の城間あたりですけじ洪溝に巻き込まれてしまつて、じ憎えむ。松田は近づいた携帯電話が鳴つた。すべに受信すると、松田の声が聞こえてきた。

「運いな、今じいた？」

あつた携帯電話が鳴つた。余程の緊急事態が生じたときだつた。とつて間に合つはずがなく、から連絡するには、余程の緊急事態が生じたときだつた。連絡は常に一方的な指示であり、カツヤから比嘉に連絡を取るといつてはなかつた。携帯電話を持つてはいたが、浦添市の城間まで来たとき、時計は五時十分前になつていて。携帯電話を抑えた。

出しあへぬ気持ちを抑えた。

はじめに、たゞんやうやうに外を眺め、時々アタセルを踏む。やうやうして、叫びながら車から飛び出しながらのうじかと思つたが、複数が届く限り洪溝は続けていた。何も考えず、何も感じない長い坂道を下り五八号線に出るじ、車はますます進まなくなつた。集会が終わるには時間がきたのはやれただけだつた。

前、カツヤは米兵たちに中指を突き立て、入遣し指で首や切る仕草をして見せた。カツヤにてつらから数台の車にクラクションを鳴らされ、前を見るといつて大きな空きがで出来た。発信する話しかる。その米兵の腰のホルダーから拳銃を奪い、一人に突きつけ自分の姿を思い描く。

肩を捲いた。

カツヤが首を横に振ると、松田は前歯の黒い残骸を剥き出しにして笑いながら小柄な少女の肩を抱いた。

「だから、どの子のチャンネルもその集金のことはつかりですよ。アメリカーに小学生が強姦されたといつて、八万五千人を集まつたといつて騒いだが、それで遅れたって、お前も

時間がかかるてしまつて、すみませんでし「た」自分の言葉が、ちゃんと意味をなしてくるか自信がない。自分の声が、自分の体とは別のどかかるらせられていなかつて、比嘉の前で話していくといつ実感がなかつた。比嘉はテレビの画面に目をやつたまま、カツヤの方を見つめてしまつた。画面には、カツヤが言った集会が映つてゐる。松田が薄笑いを浮かべて赤い缶を少女から取り、テレビの画面を見て言つた。

時間がかかってました、すみませんでした

「用事があるて、宜野湾まで行つてたんだすが、集会があつたらしくて、大渋滞で予想外に始めている。

カツヤは頭を下げ、ノーブルに腰を下しあした。座りながら、ノーブルの上に錠剤のバーがあ
り、銀紙の破片が散らばっているのを見た。小柄な少女が畠田に抱きしつへど、コ一ラの缶を受
取り、同じ手で口に吸つ。馴れた仕草だった。カツヤを見て笑つている少女の目は、焦点が描

すみませんでした

の歯に添って、口で深くシンナーを吸つた。

前まではおなじみだったが、今度はカツヤは察しだした。

中に入ると、ソファに向かい合って座っている比嘉と松田が同時にカツヤを見た。頭を下げ分かった。左の脇には脚でオカミラがしゃがんでいて、少し光を反射してくる。体の中何が歪み、しだ。壁の奇形たぐいの上にいくつ色のハイライトが転がる。体の中何が歪み、しだ。左の脇には枕を埋めていたが、背中で羽を広げている鳥の姿から、すばるマコだと分かってソファの方に歩みながら、ソファの枕はなんていふ女に気がついた。下半身を布団で覆われた女は枕に顔を埋めていたが、背中で羽を広げている鳥の姿から、すばるマコだと分かってソファの方に歩みながら、ソファの枕はなんていふ女に気がついた。左の脇には脚でオカミラがしゃがんでいて、少し光を反射してくる。

「アリス」「アリス、おまえがアーヴィングの本を読んだんだ？」

「お前がお前でいいんだよ。」
「お前がお前でいいんだよ。」

金で吊してやれわね」「いいに比嘉が口を開いた。「本気で米軍を叩き出さうとした理由なんだから」松田が大声で笑い出しだ。体をじてり、手をひいてかられないと、手に笑い続ける。松田を、小柄な少女がきょとんとした表情で見ていく。そなた。カツヤは胸の中でうるさい。比嘉の言つ通りだった。それ以外に方法などない。ただと思つた。少女を暴行した三名の米兵たちの醜さに釣り合つた。だが、必要なのは、もじとい醜い早朝の冷氣の中、車の通り少ない五八号線の中央分離帯のヤシの木に、米兵の子どもの下がっている。針金が喉に食い込み、青黒く膨れ上がつた頬と、血の氣の失せた蠟色の体は、別の組成でできていよいよ見える。薄い瞼がめくれて眼球が半分飛びだし、口からは小さな舌がみ出している。膨れた腹にメロメロの瘤み目のよつて浮いている靜脈。むちむちした脚は屎と便で汚れ、ハエが群がつていて。走ってきた車の運転手は、自分が目にしたものが信じられず、車を止めて確認して余りにも非現実的な感じがして、そのまま走り過ぎてしまつた。だが、基地の金網に向ひつから差し始めた朝日が、幼児の姿を疑いのないものにし、最初に車を止めた運転手が、吊り下げられた遺体に叫び声を上げるまで、長へはかからないだらう。

比嘉が手にしたのは、アイスキーのグラスだった。氷の解けたグラスに、カツヤはすべに新しい手はかかるべきかかった。比嘉の手がテーブルに伸びる。カツヤはその動きを注視した。

松田の口調と表情が変わった。小柄な少女が松田の肩をなでていた手を止める。カツヤは頭を

「だらだら、何ですくへしていいのか、は？」

井解してつまづいていいのか気つき、カツヤはあわてて口を止めた。たとへいせき、

「やうやくあみです」

松田がからかうかひなひと口調で言つた。

だらだら、やうやくあみ取れだらう。お前、独り占めするひだりだつたんか。」

「カツヤよ、いくのを捕まえたじやないか。もう調べたんだけど、その男のこと。教員

カツヤは、どう対応した方がいいかを必死で考えた。比嘉は無表情のままカツヤを眺めていた。浴室に横たわってたらしく涙を流している男の写真の上に、比嘉が男の名刺を放る。比嘉が見逃すがないのを分かっていたのに、そのことを意識しないように努めていただけじたとき、部屋の中を調べられてネガも入されていることを頭の隅で予想していた。比嘉には、マユがアパートに連れ込んだ男が写っていた。マユがベッドに横たわっているのを出しでテーブルに放つた。滑って広がった写真を見て、カツヤは体が冷えていいを感じた。

口の中が乾き、次の言葉を探しかねているカツヤに、比嘉が上着の内ポケットから何かを取

「あ……」

ラの缶を渡す。松田は一息大きく吸つて、少女に缶を返した。やさしきながらカツヤと比嘉を見ていた。松田の肩に太腿を押ししつけていた小柄な少女が、口に向かって目をやつただけで、取らうとはしなかった。松田はベッドに腰を下して、形にでもなじみ出してしまった。

「今週はずつと女が熱を出して動けなかつたのですか、すみません、それで立て替えた。手に持つていた封筒をテーブルに置くと、比嘉にもう一度深く頭を下げた。

そう言った松田の腕を、小柄な少女がすねたよつて叩く。松田の言葉にカツヤは現実に引き集まつて、ふとひつ伏せになつてマエのことで気にしてる者はいなかつた。

生徒の姿が目に残る。カツヤはベッドのマエを見た。米兵に暴行された少女のために数万人が興奮に包まれて拍手が鳴りやまない。画面が変わり、ニュースキャスターが話し始めた。日本人も日本人も、いや沖縄人だって本気で考へはしない。演壇で訴える女子高生生の言葉に聴き入り、集会の参加者たちは涙が流れている。女性が話しあがめられると、会場はそれ以外の方はありはしない。カツヤは胸の中で繰り返した。そいつでやらなければ、ア

何も残らなくなつた。やつぱり気がしてならないからなつた。
いんだ」とカツヤは思つてゐた。底のない空虚が比嘉の中にあつて、全てはその中に消えていなかつた。ビデオを撮つてゐる間、比嘉がそつやつていつひで時間をもつてしまつたのといたつた。

テレビの画面は何かの映画をやつたりながらだった。比嘉には特に関心を示さなかつた。
に向けられていた。
成を考えながら移動して撮影を続ける。その一方で、カツヤの意識の半分以上は、すこしと比嘉それから半時間近く、一人がマユの体を弄ぶのを撮り続けた。途中で手持ちに変え、画面構

樂しんでいた。
て執拗に口を吸い、松田はバイブレーターを抜き取つて核を刺激し、マユの体が反応するのを脚を開じ、つするのを押しとどめ、ゆりへりと出しこれする。小柄な少女は上半身を押さえ
通りにすると、松田はゆりへりとバイブルーラーを肉の間に沈めてへんへん。マユが体を震わせ、
松田はマユの脚を広げて指で性器を開き、アソブで映せ、といつてカツヤを見た。指示するな氣持ちになつた。

そのなれなれしい様子に、当初抱いた印象とは違つたかさが見えて、カツヤは気圧された
の突き出した尻に軽く当たつた。少女が声をあげて振り向き、松田に怒つたような表情を見せた。

「うき教えたりおりにやれよ。お、起きて仕事やれよ、クズ女が」
隠しかめる。
スリを飲まされたな、と思つた。松田はバイブルーラーにゼリーを塗りたべると、小柄な少女
は首を振つたが、それ以上の抵抗はできなかつた。焦点の定まらないマユの目に、カツヤはク
胸へと舌を這わせ、顎を覆おうとする手をとけて、マユの唇の間に舌を差し込んでく。マユ
松田が容赦なくマユの頬を張る。マユは薄く目を開けた。小柄な少女がマユの首筋から鎖骨、

松田がマユの体を仰向けにすると、小柄な少女が頬を叩いた。マユは苦しげな声を漏らして
な

自分がやつたことの後始末はちゃんとじつけられよ。前の前にも、ビデオに撮つて少しでも様がんと
「おのを使ふ女だ。カツヤよ、不良品つかまされて不満があつたのかしらんがな、自
由へり叶はず。

画のスパンチを入れる。松田と小柄な少女はベッド上があり、マユの下半身を覆つっていた布団
がつて比嘉にそむいて、ビデオカメラのヒルカラにてらすつた。アソブが入つているのを確認して、録
松田は鼻で笑い、ビデオカメラを顎で示し、撮れ、と言つた。カツヤはソファから立ち上
「お前にやつて腰脇がなんのは分かつてるがな」
水を入れ、バイスキーを注いだ。カツヤはソファから立ち上

写眞の横に小さなマツチ箱が抜けられる。カツヤは喫茶店の名が書かれた箱に手を伸ばした。ジーンズを下ろし、下着を脱いで浴室の隅に置いた。比嘉の前に立つて、右手に箱を持ち、左手で性器を握つて刺激を加える。比嘉の怒りを早く収めるにとか頭になかつた。しかし、焦れば焦るほど性器は硬くならなかつた。ペッドでいたがられているマユの裸体が目に浮かぶ。

蹴つた。神経が高ぶつていて痛みは我慢できたが、吐き気をこらえるのがきつかった。殴打は一、三分でした。顔を殴られなかつたのは、仕事に差し支えがないように比嘉が配慮したのだと思つた。いれな思つたり軽くすむかもしれない。そつと考へが浮かんだのを悟られないように、カツヤはつむじで顔を歪めた。カツヤの足元に、一枚の写真が放られる。性器にマッヂ棒を差し込まれた男が、涙と鼻血で汚れた顔を歪めて立つてゐる。その前にしゃがんで、マッヂ棒を握つて立つてゐるエの横顔には、かすかに笑みが浮かんでゐる。「やれ

「ヤは助けを求める声を聞いたよ、うな気がした。松田が三脚の横に立ち、カメラの画面をのぞき込も。行け」と松田がカツヤに言つて、黒い前歯の根本を舌先で左右になんで笑つた。

比嘉は浴槽に腰掛け煙草を吸つていた。カツヤが浴室の中央に立つと、比嘉は浴槽に吸い散を投げ捨て、カツヤの正面に立つた。いきなり鳩尾に右の拳が突き刺さつた。カツヤはまともに突きを受けて前にかがんだ体をすべに起つた。比嘉はカツヤの脇腹に膝を入れ、内腿を

以上を見る見た。此景はカツヤに目で合図すると浴室に入っていく。

比嘉が立ち上がりて上着を脱ぎ、アの背にかけ。カツヤは恐怖心より、ほつとした

へた頬に軽か寄る。松田はベルトに腰掛け、シナ一を吸い続けた。

松田が少女の背中を軽く叩き、ハサミを手袋のテーブルに置いてあつた赤いコートの缶を取
り、ぐいぐい呷る。カツヤを見て笑ひ目がどうと流れ出しそつだつた。日の下の隈やむへ

「好，」叶璇

女が面白そうに器具を激しく動かす。

い。その柔軟な指の動きも、力任せには斯ういふことはない。

松田は工と小柄な少女を仰向に並べて交互に体を重ね、腰を動かしていく。工の足を開いて膝立ち、膝が肩と同じ高さで折り曲げて、松田は工の体を蹴し突き上げ、呻き声を漏らす。太い指が工の腰に食い込み、工は目を瞑り開いて、「一ノ瀬さん」と呼んでいた。

「まっすぐ立て」
比嘉の言葉通りにして目を開ける。性器を放した比嘉は、箱から新たなマツチを取り出す。
箱の側面に火薬がいすられ、発火する音のあとに火薬の焼ける臭いが立つ。火は揺らぎながら大きくへなつていて。涙がある、比嘉の姿と火が激しく揺れる。性器の先に火が近づいていく。
叫び出しそうにならぬを必死で抑えて、カツやは火を見つめた。比嘉の指先が性器に触れる。
太腿の付け根から突き上げた力が、性器の根本から先へ走る。一度、二度とつねつて襲つ痛み
と快感が性器からあふれ出す。血が混じた精液が一本のマツチを押し出し、床に滴り落ちる。
マツチは肉の先から一センチほど突き出て桃色の精液にまみれている。比嘉はマツチを吹き消
し、指についた汚物をカバンのトッシュで拭いた。マツチの箱を投げ捨てた比嘉の手が、ズボ
ンのボケットをまわべり、ナイフを取り出す。金属音がして、飛び出したナイフの刃先を見た

それはまだ始まりにすきなかつた。比嘉の長い指に握りしめられて赤黒くふへらんだ性器の
先に、緑色のマツチの頭が見える。比嘉の右手が一本目のマツチを取り出す。すでに入つていて
まるでチチの下にあつたが、軸に沿つてひりへりと差し込んでいた。カツヤは目を開じて両手
を握りしめた。性器の内側を削るよつて入りてマツチ軸が止まり、異物感と痛みでつぶ
を漏らした。性器を引き寄せながら比嘉が鳩尾を突く。

198 やれどもカツヤの性器を萎縮させた。カツヤは目を開じて激しく手を動かした。肌寒い鳥肌が立つてから、いかみに汗が噴出する。胸に手が触れたと思ふ、目を開けた瞬間に、カツヤは突然飛び起きた。腰から床に落す、壁に後頭部を強打した。頭を抱えて横向きに倒れる。カツヤはあわてて四つん這いになつて頭を下げる。またカツヤの脇腹を比嘉の足が踏みつけた。カツヤは立ち止まらず箱を持ち上げた。手を動かし性器を刺激し続けた。 perché の中で轟うちと硬さを増していく。カツヤは激しく手を動かし性器を刺激し続けた。性器が失われない限り、カツヤは箱からマッチ棒を取り出し、軸の先を性器の口にあてた。だが、やがてから先が止まなかつた。緑色の火薬に入差し指を当て、一気に差し込んだ。するとだが、じつして手が言いくといふと聞かない。焦りが増すほどに性器が萎えそつてゆく。カツヤは握りしめて手を動かし、硬さを保つとした。

比嘉が前に立ち、つむじつむじしていたカツヤの顔を上からと、左頬を拳で打つた。浴槽の方によるみたいだが、どうにか慣れはしなかつた。比嘉の差し出した手にマッチ箱を置くと、机のすつ立て、と言つて比嘉が性器を握りしめる。血が脈打つ流れ、カツヤは今にも射精しそうにならえた。先端に固い物が当たつたと思つた瞬間、尿道をまつすべに軸が貫いた。思わず腰を引きやつにならざるを得ない。性器をつかんだ比嘉が引き戻し、腹を殴りつけた。カツヤは息が詰まる

カツヤは、赤いマリヤロキアの髪られた爪が剥き取られた瞬間を思い出した。比嘉の手がカツヤに血溜まりがでている。後頭部が陥没し、血では立った髪の間から夾竹桃の花の色をしらべツの方に目を移し、カツヤは立ち尽くした。ヘッドドリルが伏せになつていてる松田のまわりに反射していい。その音が今まで耳に入つて以來なかつたことに気がついた。テレビの画面が室内に反響している。

テレビはアメリカのプロバスケットボールの中継をやつしていた。英語のアナウンスと声援がマユを残し、ジーンズと下着を拾上げ、逃げて浴室を出た。カツヤは四つん這いになつてつだれまたまのし……。同じ言葉がくり返し頭をめぐる。カツヤはあわてて取り上げた。立ち上がりながら見ると、縁に引っかかる比嘉の足の指が虫のよつとうに見えて。どうしたらいいのか、どうの手に、ライターが握られたままのを見て、カツヤはあわてて取り上げた。立上がりマユに引き抜く。床に散った血と精液の臭いが、ジーナの臭いに混じる。濡れた床にひりいたマチの軸を一気思わず後じさったカツヤは、性器の痛みに呻いた。半立ち状態の性器からマチの軸を一気き上がった背骨を境に背中が割れて異様な生き物が姿を現す。

血が泡になれば、膝が崩れて四つん這いになると、かーかーと何かを吐き出そつて喘いだ。浮様に赤茶色の染みが覆っている。焦点の定まらない目をカツヤに向けたマユは、急に力尽きた床に空き缶の落ちる音が響く。カツヤはマユを見た。拡散するジーナの臭いと混ざり合ふ反射する。

カツヤは浴槽の中を見た。首が窮屈に横に曲がり左肩に押しつけられていて。耳の穴に溜まつた火が奥に吸い込まれていく。衣服にいた火はゆらゆら燃え続ければ、赤く腫れ上がつた後頭部がぶつかり、純い音が浴室内で響く。炎に包まれた比嘉の体が仰向けてずり落ちる。かのめを擦しだが、指は宙をさまよつただけだった。大理石のタイルが貼られた浴槽の縁に見えた。比嘉の斤足が裸き、斜めになつた体がゆりへりへり浴槽に倒れていく。比嘉はつた赤紫の炎が瞬時に比嘉の上半身を包んだ。掴みつかぶつとする比嘉を、マユは軽く押しつかれて、髪や衣服に液体がまみれながら降りかかる。振り向いた比嘉の顔にひびいた液体が浴びせられる。比嘉が何を言つて、マユが手にてりライターに火がつくのは同時にアパートの開く音が聞こえた。比嘉の背後に近づく裸の女の姿が見える。赤い缶が比嘉の性器に伸びる。カツヤは今度は抗あらはる、比嘉の手を待つた。